

山地利用のもたらした土壌的改変について

—群馬県神流川上流域の事例—

佐野 美知子

(1) 目的

地形図に見られる急斜面のとび地耕作地が焼畑に由来すると考えた。つまり焼畑を行ってみて、土壌の理化学的條件が優れている場所を常畑として存続させ、現在に至っていると推察したのである。本論文では、常畑が付近の林地と比較して土壌の性質がどのように異なるかを認識するとともに、その性質の差異が何によるかを考察することを目的とした。土壌の性質の差は、林地を耕地に変えることで作られたものであるとの考え方で、山地利用は土壌条件に対応してなされたとの考え方が成り立つ。後者は常畑が労働条件を無視して存在していることへの説明となる。

(2) 枠組

以上の課題を明確とする為に次の方法を用いることを計画した。

- 1) 昭和期に焼畑を行った場所の確認とサンプリング
- 2) 耕地、放棄畑、雑木林（コナラクヌギ林及びナラクリ林）植林地におけるサンプルの土壌の理化学的性質を認識する。
- 3) 土壌断面をハンドボーラーにより認識する。

以上 1) 2) 3) を基に山地利用の差による土壌の性質のちがいを認識し、その結果を基礎に奥名郷における山地利用モデルを主に焼畑を行ったか否かを中心に作成する計画であった。が 1) についてはさまざまな理由により、確認がとれにくく、確認をとった場所でのみサンプリングは不可能であった為、奥名郷のモデルについては、確認を持てる段階に達しなかった。

(3) 結果

鬼石町高瀬、万場町麻生グラウンド付近、及び上野村奥名郷などについて比較考察してみると麻生グラウンド付近の斜面は植林地においても耕地においても三相分布、仮比重、粘土含有率がほぼ同様である。（腐植含有率は同一でない）これに対し、鬼石町高瀬などでは粘土含有率、腐植含有率は利用形態によりさまざまな値を示す。上野村奥名郷においては耕地においては雑木林より固相が多く仮比重も大きい。これは、麻生グラウンド付近の耕地は、耕地利用の歴史が他の耕地より浅く、土壌の性質の違いが見られるまでに達していないことを意味する。一方奥名郷では耕地と雑木林との間にはっきりとした差が認められる。

この点から山地利用は土壌の性質に対応するのではなく、山地利用により土壌が変化したと考えられる。筆者は耕作を行うことで団粒が破壊された固相率が大きくなると考えている。また粘土の含有率も増加するとも考えられるが、一方耕地では土壌が移動しやすい為粘土含有率においては一定の傾向ができなかった。腐植については奥名郷では特に雑木林と耕地での差が大きかった。また耕地ではほぼ 3～4 % 程度と含有率が一定している。この雑木林はその状態から焼畑を行ったと思えるが、土

壤断面はやや層の分化が見られる。これに対し耕地では層の分化はない。土壌の厚さについては雑木林と耕地との間に差はなかった。

以上の結果を基礎に奥名郷で植林地・耕地・雑木林において、三相分布、仮比重、粘土及び腐植含有率、また簡易ボーリングから、主に焼畑との関連からモデルを作成した。

国有産業従事者からみた小田原市の地域性

佐 山 弥 生

(1) 目 的

城下町・宿場町として古い歴史を持つ小田原市。その小田原市に今も残る固有産業の現状を把握する事。そして最終的に、その固有産業の従事者数の推移から小田原市の地域性を考察することを目的とした。固有産業として、小田原の特産品である箱根物産・小田原蒲鉾・そして梅干製造の要因である梅栽培の3点をあげて、文献資料と現地での聞き取り調査によって研究を行なった。

(2) 枠 組

第一章で地域の概観を述べ、第二章で梅栽培について栽培面積・農家数の推移から動向を探り、梅の依存度を調べることによって将来を展望した。そして、最後に梅干製造について触れた。第三章は、蒲鉾について取りあげ、原料魚と生産額・製造地から考察を行ない、第四章では、箱根物産について少し比重をかけて扱った。成立基盤と過程・生産額及び輸出額の変化、そして企業数並びに従事者数の人口比率の考察をし小田原市の地域性を見、まとめとした。

(3) 結 果

小田原市は、ここ十数年で急速に近代化が進み、従来の交通都市・商業都市としての機能を失ない工業都市へと移行しつつある。さらに首都東京の衛星都市としての性格を帯びようになってきた。この為、固有産業が小田原市に占める割合は、大きく後退した。しかし、梅栽培に関しては家族労力で済むという利点から兼業可能であり都市化する小田原にあって増加傾向を示している。また、蒲鉾は長い間に形成された市場・信用により安定した需要を持っている。そして、最大の悩みであった原料魚不足からは「クローカー」のすり身輸入により解放されようとしているし、新しい経営へと変わりつつある。箱根物産は、伝統品全般が持つ後継者不足などの問題を抱えているが、従事者の人口比率からみてその伝統は維持されていくであろう。必ずしも楽観できないが、新製品の開拓や経営の合理化・協同化、さらに木屑の有効な処理方法を考えていけば低い収益を高めることができる。このように、工業化しつつある小田原だが固有産業は依然存在し、今後も時代に応じ変化し存続されていくと思われる。

こうして小田原市は、近代工場が建ち住宅化の進む酒匂川兩岸や市の東北部、都市化する駅前のかで、小田原城に象徴されるべく、かまぼこ街など旧小田原町に古い歴史の面影を残している。